日本言語政策学会第 27 回研究大会　パネル発表（2025 年 6 月 8 日）

定住外国人は「日本語読み書き弱者」なのか
―学習・教育から社会的実践としてのよみかきへ―

福永由佳(国立国語研究所)・高民定（千葉大学）
角知行・福村真紀子（茨城大学）

【趣旨】

本パネルでは、新識字研究(New Literacy Studies)などが主張する読み書きの見直しをもとに、①定住外国人にとっての読み書きとは何か、②定住外国人の読み書きを教育現場でどのように扱うかについて、調査結果をもとに再考することにより、言語教育政策への提言につなげていきたい。日本に中長期的に滞在する外国人は増加しており，彼らへの支援は日本社会が取り組むべき大きな課題である。なかでも日本語教育は支援策の大きな柱と位置付けられ、文化庁は日本語教育施策を推進しているものの、生活者と呼ばれる定住外国人の多くは、学習機会が少ないのにも関わらず，日常生活のさまざまな場面でやみくもに日本語読み書きが求められている。日本語の「読み書き能力が低い人々」は依存的で弱く孤立し社会参加が難しい「日本語読み書き弱者」であるとして、従来は語彙や文法知識の伝授を通して読み書き能力を向上させることを目指した教育が推進されてきた。しかし、1980 年代に提唱された新識字研究は読み書きを社会や生活から切り離せない社会的実践と見なし、「読み書き能力が低い人たち」は多様な別の形で読み書きを実践する存在と主張する。本研究では，読み書きを日常生活にある「よみかき実践」ととらえなおし、定住外国人のよみかき実践の実態を調査により明らかにすることを目指している。本パネルセッションでは、①研究プロジェクトの研究概要、②基盤とする識字研究、③調査結果についての話題を提供し議論する。

【パネル発表の流れ】

＜話題提供＞

１．研究プロジェクトの概要（福永由佳）

２．社会的実践としてのリテラシー（角　知行）

3．調査結果①　テクノロジーを活用する定住外国人の「よみかき実践」（高民定）

4．調査結果②　他者との結びつきを活用する定住外国人の「よみかき実践」

（福村真紀子）

＜質疑応答、ディスカッション＞